

第10回講義 (20160701)

The lecture by Prof Benjamin Schnieder

Title 'Ground and Consequence'

Contents: Logic of the logical connective 'because'

<講演の後で考えたこと>

'But he[Socrates] requires more; he does not want to know any sort of condition, he wants to be told the aspect by which, or in virtue of which a pious thing is pious. The Socratic question, hence, aims at the ground of piety.'

(Fabrice Correia and Benjamin Schnieder, 'Grounding: an opinionated introduction', p. 3)

'any sort of condition'は、「xは経験である」という主張の根拠であるとおもわれる。

それに対して、'the aspect by which, or in virtue of which a pious thing is pious'<sup>1</sup> grounding

は、出来事の原因でも、行為の理由でも、主張の根拠でもなく、第4の'because'を示していると Schnieder さんは考えている。

'Construed this way, Socrates' argument makes essential use of principles about grounding. It involves one substantive grounding claim (relational properties are grounded in relations) and it implicitly draws on structural properties of grounding, namely asymmetry and transitivity, which are nowadays widely accepted among philosophers working on grounding.' (Ibid. p. 4)

主張の根拠の場合には、because は対称的でありうる。

$a < b, b = c$	$\vdash$	$a < c$	「 $a < c$ because $a < b$ 」
$a < c, b = c$	$\vdash$	$a < b$	「 $a < b$ because $a < c$ 」

すべての関係的な性質 F の場合に、 $Fx$  とその理由 p とは、非対称であるとはかぎらない。

「A は B の北にある、なぜなら、B は A の南にあるから」

「B は A の南にある、なぜなら、A は B の北にあるから」

この場合、「なぜなら」は主張の根拠を説明している。

というわけで、まだ第4の「なぜ」と「なぜなら」が何なのか、不明です。

「私は〇〇氏に投票した、なぜなら、私は投票用紙に〇〇氏の名前を書いたから」

この「なぜなら」は、正しい使い方だろうか。もしそうだとすると、この「なぜなら」は、原因、理由、根拠のどれを説明するのだろうか。

## § 6 New Relativism

### 1 新相対主義とは何か

### 2 Kaplan 'Demonstratives'

### 3 Kaplan の使用の文脈と値踏みの情況の区別による文脈主義と相対主義の区別

#### 4 知の相対主義について

##### 1 懐疑論的論証

##### 2 「知る」の文脈主義

##### 3 「知る」の主体感受的不変主義 (Subject-sensitive invariatism, SSI)

**Contextualist semantics for "knows."**  $[[\text{"knows"}]]_{\langle w, t, a \rangle}^c =$   
 $\{ \langle x, y \rangle \mid y \text{ is true at the circumstance } \langle w, t \rangle \ \& \ x \text{ believes } y \text{ at } \langle w, t \rangle \ \& \ x \text{ can rule out all the alternatives to } y \text{ that are relevant at } c \}.$

**SSI semantics for "knows."**  $[[\text{"knows"}]]_{\langle w, t, a \rangle}^c =$   
 $\{ \langle x, y \rangle \mid y \text{ is true at the circumstance } \langle w, t \rangle \ \& \ x \text{ believes } y \text{ at } \langle w, t \rangle \ \& \ x \text{ can rule out all the alternatives to } y \text{ that are relevant in } x\text{'s situation at } \langle w, t \rangle \}.$

文脈主義は、「知る」の意味を発話の文脈 C に依存するものと考える。

A が「x は y を知っている」と発話する場合、文脈主義は、知識の帰属者である A の発話が行われる文脈によって「知る」の意味が決まると考える。<知る主体 x が、発話が行われる世界と時間において y が真であり、x が y を指示しており、発話が行われる文脈において関連する y に対するすべての他の可能性（たとえば、ポケットの紙幣がすられているとか、その紙幣が偽札である、などの可能性）を x が排除できる>とき、その発話は真である。

主体感受的不変主義は、「知る」の意味を知る主体の状況に依存するものと考える。

A が「x は y を知っている」と発話する場合、<知る主体 x が、発話が行われる世界と時間において y が真であり、x が y を信じており、x の状況において関連する y に対するすべての他の可能性（たとえば、ポケットの紙幣がすられているとか、その紙幣が偽札である、などの可能性）を x が排除できる>とき、その発話は真である。

主体感受的不変主義は、「ジョンがポケットに 2 ドル持っていることを知っている」の意味は、主体ジョンが置かれている状況に依存すると考える。「それが偽札でないと知っていますか」と問われる前なら、ジョンは「私はポケットに 2 ドル持っていることを知っている」というだろう。しかし「それが偽札でないと知っていますか」と問われた後なら、ジョンは「私はポケットに 2 ドル持っていることを知らない」というだろう。

ところで、ジョンは「それが偽札でないと知っていますか」と問われていないが、第三者 A さんが「ジョンはそれが偽札でないと知っていますか」と他の人に問われた後ならば、第三者 A さんはその発話の状況 C においては、「ジョンはポケットに 2 ドル持っていることを知らない」と言うだろう。その時でも、ジョン自身は、「私は 2 ドル持っていることを知っている」というに違いない。文脈主義では、この状況では、第三者は、知識帰属の発話の状況におけるより厳密な意味で「知る」を用いることになると思う。

しかし、このとき、SSIならば、Aさんは以前と同様に、「ジョンはポケットに2ドル持っていることを知っている」と答えることになる。

文脈主義の問題点：文脈主義では、Aの最初の「ジョンはポケットに2ドル持っていることを知っている」という発話も、ジョンのポケットの中の2ドルが偽札で第二の発話「ジョンはポケットに2ドル持っていることを知らない」も真となる。これは、「知っている」が **factive verb** であることを考えるおかしなことになる。なぜなら、第一の発話を真とする以上は、Aは「ジョンがポケットに2ドル持っていることが真理であることを認めており、それゆえに、これは、Aがジョンのポケットの2ドルが偽札である可能性を考えることと矛盾する。

#### 4 「知る」の相対主義

Semantics for “knows.”  $\llbracket \text{“knows”} \rrbracket_{\langle w, t, s, a \rangle}^c =$   
 $\{ \langle x, y \rangle \mid y \text{ is true at the circumstance } \langle w, t, s \rangle \ \& \ x \text{ believes } y \text{ at } \langle w, t, s \rangle \ \& \ \text{at } \langle w, t \rangle,$

$x \text{ can rule out every possibility } (w', t') \in s \text{ such that } y \text{ is false at } \langle w', t', s \rangle \}$

ここでcは発話の文脈、 $\langle w, t, s, a \rangle$ は評価の情況、wは世界、tは時間、sは関連する可能性の集合、aは付値関数、wとtは発話が行われる文脈Cの世界と時間でもある、w'とt'は評価の行われる様々な情況C2の中でwとtとは異なる場合の世界と時間。

相対主義者は、「知る」の意味を評価の情況に依存するものと考える。

Aが「xはyを知っている」と発話する場合、<xが、yが発話が行われる世界と時間において真であり、知る主体xがyを信じており、評価が行われる世界と時間と関連する他の可能性においてyが偽となるような関連する他の可能性に属しているすべての可能性を（たとえば、ポケットの紙幣がすられているとか、その紙幣が偽札である、などの可能性）xが、を排除できる>とき、その発話は真である。

**Relativist postsemantics.** A sentence S is true as used at context  $c_1$  and assessed from a context  $c_2$  iff for all assignments a,

$$\llbracket S \rrbracket_{\langle w_{c_1}, t_{c_1}, s_{c_2}, a \rangle}^{c_1} = \text{True}$$

where  $w_{c_1}$  is the world of  $c_1$ ,  $t_{c_1}$  is the time of  $c_1$ , and  $s_{c_2}$  is the set of possibilities relevant at  $c_2$ .

**Circumstance of evaluation.** *Let a circumstance of evaluation be a triple  $\langle w, t, s \rangle$ , where  $w$  is a world,  $t$  a time, and  $s$  a set of relevant possibilities.*

**Content.** *Where  $\alpha$  is a formula, predicate, or singular term, let  $|\alpha|_c^a$  denote its content at context of use  $c$  under the assignment  $a$ .*

**Intensions of contents.** *The intension of  $|\alpha|_c^a$  is the function  $f$  from circumstances of evaluation to extensions such that  $f(\langle w, t, s \rangle) = \llbracket \alpha \rrbracket_{\langle w, t, s, a \rangle}^c$ .*

主体感受的不変主義では、 $x$ が、 $x$ の状況において想定される他の可能性を排除できるとき、 $x$ は知っているという。

文脈主義では、 $x$ が、 $A$ の発話の文脈において想定されている他の可能性を排除できるとき、 $x$ は知っているという。

相対主義では、 $x$ が、発話の評価の状況において、想定される他の可能性を排除できるとき、 $x$ は知っているという。

主体感受的不変主義では、 $x$ 自身が排除できることを知っている。

文脈主義では、 $x$ が排除できると、発話者  $A$  が考える。

相対主義では、 $x$ が排除できると、 $A$ の発話の評価者が考える。